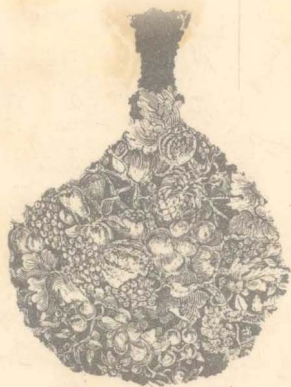


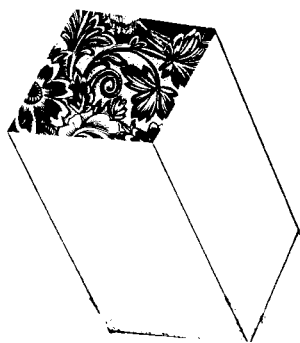
芹澤光治良作品集

第五卷



巴里夫人 巴里に死す

芹澤光治良



新潮社版

巴里夫人・巴里に死す

〈芹澤光治良作品集5〉

昭和49年4月10日 印刷
昭和49年4月15日 発行

定価 750 円



著 者

芹 澤 光 治 良

発行者

佐 藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町71
電話 (03) (260) 1111(代表)
郵便番号 162
振替 東京 808

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

新宿加藤製本株式会社

© Kojiro Serizawa 1974 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

巴里夫人

巴里に死す

装
画
司
修

芹澤光治良作品集

第5卷

巴里夫人

序 章 パリの淫売宿で

1

一九五一年に、日本はまだ、アメリカの占領下にあった。日本人は全部、連合軍の捕虜だといわれた。外国へ旅行することなど不可能に近かった。長い戦争中国家の窓が閉ざされていたので、敗戦後、国民はみな遠く国外に目をやり、占領軍をも、窓の外から来た人びとだということだけで、歓迎するかなのような奇怪な現象さえ生じた。国民は極東といわれる東洋の果ての狭い島国で、息がつまる思いだったからであろう。誰も彼も、できれば国外に脱出したいと、祖国をうしなつた心情であつた。しかし捕虜であるから、四つの島を拘留所にして、国外にあつた日本人をも、ここに集めて押しこめるしまつで、脱出など思いもよらなかつた。ただ朝鮮事変が起きてから、占領軍の日本にたいする態度も多少寛大になつたらしく、五〇年には、はじめて文学者がペン大会にイギリスへ出かけることをゆるされた。アベ君とキタムラ君とは、まだ日本の外交機関のないイギリ

スに行つて苦勞したらしい。次の五一年には、イシカワ君夫妻、イケジマ君とともに、ぼくもスイスで開催される同じペン大会に出席することをゆるされた。

ゆるされたといつても、往復の旅費のほかに、会議が一週間、その後各一週間、つごう三週間分の滞在費として一日十二、三ドルの割合で、日本金をドルにかえてくれただけである。どこの国にも日本の外交機関はなくて、海外では、日本人は世界の孤児であつた。ビザ一つにしても、会議地のスイスはともかく、他の国のをもらうことが困難で、たとえば、フランスのビザは日本を發つ前にもらえず、イギリスについてから、ロンドンのフランス領事館に日参して、やっと、わずか三日間パリ滞在をゆるす、という通過ビザしかもらえないでいたらくであつた。お国にある間はいっさい金儲けはせずと、行くさきさききの国の政府にいちいち申し入れたり、日本の外務省からは、国外で政治的な話をしてはならぬと、猿轡をはめられたり、そのうえ、未開の土人のように連合軍の指定する病院に行つて、むやみといふんな種類の注射を強制的にさせられたり、さんざんな目にあつた。

三十年前にフランスへ留学した時のことを思えば、日本の転落ぶりが、その一つ一つに現われていて、憂鬱になつた。ぼく自身も三週間分の滞在費で、できるだけ長く滞在

しようと、さもしい根性で、財布の中ばかり気にしなければならぬわびしい旅で、二十数年前にくらべれば、大名が乞食におちたようなあいまいであった。

エール・フランスでロンドンからパリについて、飛行場からバスでアンバリッドの空港に送られて、やっと二十数年ぶりにパリについたと、ぼくは大きく吐息した。マロニエの花はもう散って、晩春の午後のことであった。空港の地下道をイシカワ君たちと上って行くと、出口に数人の日本人が集まって迎えてくれた。こんなにパリに日本人がいたかと驚いたくらいだ。タカダ氏、ササモト氏、オケタニ君らであったが、ぼくは誰にも面識がなかった。

パリについたらどうにでもなると、ぼくは安心して、昔の友人にも手紙を出してなかった。そこに迎えてくれた日本人は、みなイシカワ君やイケジマ君の知人であったろう。オケタニ君は親切にぼくの宿も予約してくれてあって、しかもぼくの財布の軽いことを察して、素人下宿を探してあった。その下宿が、オケタニ君の住む同じアパートマンで、イケジマ君もオケタニ君と同じ下宿であったから、いっそう便利でもあった。

集まった日本人のなかに、ふしぎな日本婦人がいた。パリの日本婦人らしくきどったところがなく、服装や化粧にも無頓着に、黒髪を小娘らしく紫のリボンでたばねている

が、三十代であらうか、四十代であらうか、年齢もわからない。パリの街なかで靴下もはかずに革サンダルという不謹慎な軽装で、男のぼくのトランクなどをさっさとタクシーのたまりへ運びこんで、

「先生、早くお乗りになって！ 私が先生とイケジマさんをお送りします。オケさんはイシカワ先生をお送りしますから」と、せきたてた。

女性を大事にするパリでは、まったく逆な行動である。下宿ときまっていたサン・サールス街のアパートマンについても、ぼくたちをいたわって、女腕で荷物をエレベーターへ運び入れたり、二階のぼくにあてられた家のマダムにぼくを紹介したり、四階のカメンスキー夫人の家へイケジマ君を案内したり、まめまめしく動いて、いっしょに来たタカダ氏やササモト氏を無視していたが、最後に、「皆さん、五時までにドームにご案内してください。オケさんもイシカワ先生もドームにまいりますから」と言いのかして、一人帰っていった。

いったいその活動的な日本婦人は誰であらうか、オケタニ君とどんな関係であらうか、何をする人であらうか、ぼくは好奇心をそそられた。

タカダ氏は長くパリに滞在する彫刻家で、戦後すぐれた文明批評を適かに日本の雑誌に送っていた人であり、ササ

モト氏も政治評論などを日本へ送っていたから、文藝春秋の編集長のイケジマ君には親しいのであろう。その二人に誘われて、イケジマ君とぼくはすぐ下宿を出て、セーヌ河のほとりを歩いて、パリの空気を胸いっぱいすいこんだものだ。

あの日本婦人の言ったとおり、五時にモンパルナス街のドームというキャフェへ行つた。テラスにはオケタニ君がイシカワ君たちとすでに待っていた。タカダ氏とササモト氏はどうすすめても、いっしょにテラスで休まずに二人とも他日を約束してすぐ別れていった。そのあつけない別れ方が、あとまで何か心にかかった。テラスでアペリチーフ（食前の酒）をのみながら晩春のパリの午後をたのしんだが、日本を發つ時に、アベ君がイシカワ君に紹介状を書いたとき、

「ロンドンでも、パリでも、誰のところへわらいをぬぐかで、後で日本人の關係が面倒になつてね」と、何気なしに話していたが、アベ君も苦しめたことがあつたらうかと想像されて、あの世話を焼いた日本婦人のことが、やはり氣になった。

この前パリで勉強した時は、日本を發つ時スエヒロ教授の忠告もあつて、日本人と交際しないで、フランス人にとけこんで暮したが、今度は短い滞在で、日本人も少ないこ

とだから、パリの日本人を知りたい——などと、ぼくはオケタニ君の話をききながら、ドームの前の街路樹の梢にたわむれるやわらかな光を眺めて、考えたものだ。

「オケさん、もう皆さん来てますわ。どうぞ、いらしってください」

ひょつくり、さきほどの日本婦人が現われた。さきほどのまま、色のあせた黒のスカートに、これもあせた青のセーターで、やせて青黄色い頬に、とくに紅をはいてきたようだが、その紅が、急いだとみえてまだらであるのが、微笑ましかった。

「さあマダム・アイダのところへまいりましょう」

オケタニ君はぼくたちを促した。それがオケタニ君の紹介だったかもしれない。アイダ夫人というのかと、ぼくははじめてその人の名を知ったのだが、

「では、すぐご案内してください。私はお先に支度していますから」と硬張つた顔面神経にむりに笑顔をつくるような、口を曲げるような微笑を残して、左肩をさげて一種のしなをつくって行つた。

その後姿に、ぼくはなぜか胸をつかれた。虚勢をはっているようだが、長い苦勞がしみついて年齢がはげしく感じられたからであらうが、その時は、そうと氣がつかないで、わけのわからないエロチックな様子に嫌惡が胸に來たのだ。

ぼくたちはオケタニ君に案内されて、アイダ夫人のとこへ行った。

モンバルナス街とラスバイユ街の十字路の並木の下にロダンのバルザックの寝衣像がやはり立っていた。その下を北にラスバイユ街を行って、第一の角を右に曲った。すぐ右側の古いきかないホテルにはいるのだ。

だいたいこの辺の暗いホテルは淫売宿であるが、このホテルも狭い入口から暗い廊下にはいると、うかつ者のぼくでも、淫売宿であろうとすぐ想像ついた。暗い廊下をぬけて、つきあたりの階段裏の、右側の小さい部屋に案内された。窓もない六畳ぐらいの部屋で電燈がついていた。片隅の

壁に古ベンチが一脚おしつけてある。その前に小さい丸テーブルが一つあって、その周囲に、これかかった木の椅子が数脚あるばかり。そこに二、三人の日本人がすでに腰かけていたが、その部屋の奥の暗いじめついた台所から、アイダ夫人がフライパンを手にして顔を出した。

「オケさん、先生方に召しあがってもらってください。私はオムレツをつくってますから——」

ぼくはどこにかけていいか、立ちすくんだ。オケタニ君は廊下から小椅子をはこび入れたり、そこにいた日本人を紹介したり、テーブルの上にブドー酒をはこんだり、マダム、ご飯はたいであるなど、呼びかけたりして、気さくに

手伝うのだ。そこにいた日本人は、一、二年前から留学している東大教授や文学者らで、オケタニ君の親友らしいが、そこが、いわゆる「日本料理店」であることを知らないから、ぼくは落ちつかなかった。貧しそうな日本婦人のところ、ど馳走になるように——

料理店だとは、とても想像つかない場所であった。丸テーブルには水色の厚手のタオル地の卓布をにかけてあるが、洗濯したことがないらしく、ソースやブドー酒の色が染まってじめついている。テーブルのついていたコップは、ちぐはぐで、ブドー酒をついでくれるので、手にとると、洗ってないのか白く曇っていた。皿はみな、どこかが欠けている。ジャムの空カンに箸がたくさんさしてあるが、全部塗りがはげている。フランス式に各自にわたすナブキンも、白リンネルだが、洗濯したことがないらしく灰色で膝にのせるのも不快なしろもので——部屋が暗いから、不潔が目立たなくて助かった。こんな状態だから、もちろん日本料理店だとは考えなかった。

しかし、集まった人びとは、それこそ日本の選良であり、誰に遠慮することなく日本語をしゃべることができたから、ぼくはすぐ不潔なことも忘れて、粗末ではあるが、豊かな気持で、パリでの最初の晚餐をたのしんだ。その食卓で、その日本婦人が日本婦人に珍しく知識人だということも知った。

オケタニ君は東京の工大の助教である。一九四九年にフランス政府の招きで、二度めの留学をした。おそらく敗戦後最初の留学生であつたらう。パリには日本人もほとんどいなかった。五〇年の晩秋の夕べ、もうパリにも霧がおりはじめたころ、モンパルナス通りで、オケタニ君はぱったりアイダ夫人にあつた。

「あんた、引きあげないでパリにいたの」

「あなたはたしかオケタニさんね、いつパリに來たの。日本人もパリに來られるようになったの」

二人は驚いて道の真中で、声をはずませた。

オケタニ君は戦前フランスの給費学生としてフランスに三年留学したことがある。そのころアイダ夫人は、日本大使館の武官室につとめていた。当時の武官室は機密費を多く持つていて、外交官室より勢力もあったから、留学生もときどき武官室へ顔を出して、軍人から話をきいたものだが、アイダ夫人はオケタニ君たち留学生を、子どもあつかいした。留学生はまた彼女を姉か叔母のように感じて、武官に言えないことも、彼女からとりなしてもらうほど親愛の情をよせた。

彼女は美しく、ときどき和服で出勤したりして、日本人に里心をおこさせたり、大和なでしこはさすがにいと感嘆させたりしたが、留学生たちにも、ほのかな望郷の念をいだかせた。未亡人であるとか、未婚者であるとか、日本人は胸をあつくして、噂をしたものだが、彼女はアイダ夫人とみずから称して、日本人の噂など馬耳東風と聞きながし、けつして過去を語らなかつた。秘密を持った謎の女だとか、女スパイだとか輕蔑する者もあつたが――

日本大使館がパリを引きあげた時、もちろん彼女も日本へ帰つたものと思つていたから、オケタニ君は思いがけない時に、やせて、うらぶれた彼女に、偶然行きあつて茫然とした。霧のなかの錯覚かと疑つたほどだ。

黒髪を無造作に黒のリボンでたばね、白ちやけた黒のスカートに、色あせた赤のセーター、ノーストッキングにサンドルをはき、大きな買物袋をさげて、足をひきずりながら足早に來た。頬もこけて病的に黄色な顔である。植民地からながれてきたような、この日本婦人が、あの武官室の女王のようにふるまつたアイダ夫人であろうかと、オケタニ君はしげしげと顔を見たが、この数年間の生活の苦しみが、骨身にしみついてゐることが、すぐ胸にきた。

「マダムは戦争中ずっとパリにいたのか、驚いたねえ」
「これから私のところへ行かない？ オケタニさん、日本

——」
の話をきかせてください。私、ご飯たくさんから、いらしって

そう若い声で、無理にオケタニ君を引っぱるようにして、そこから近いこの淫売宿へ案内した。

彼女はそこの三階の小部屋を借りて、長く住みついて、宿の女主人の相談相手になっているという話であった。途中モンパルナス裏のロシア人の小さい店によつて、瓜の酢漬を買ったが、その店に、このわたや日本人の好く食料品がたくさんあると、自分のことのように自慢した。台所には四斗樽のように肥った五十がらみの婦人が、丸テーブルで一人夕食をしていた。婦人は、アイダ夫人がオケタニ君とはいってきたのを不審がりもせずに、

「私は、映画を見に行きますから、あとをお頼みしますよ。マダム・アイダ」と、からだに似合わないかれんな声で言った。服装は質素だが、この女主人であろうと、オケタニ君は察して、アイダ夫人は紹介もしないが、礼儀正しく挨拶して、ともかく同じ丸テーブルの前に腰をおろした。アイダ夫人はオケタニ君の前にブドー酒やコップやサラダの皿をならべ、米をガスにかけながら、日本語で、

「困ったわ。私はずっとアンナン人になりすましていたのよ。もつともマダム・マルケの方は日本人だと気がついていたようですが、これではれちまったわ。アンナン人にな

っていないければ、ドイツの敗戦後バリにはいられたかったけれど、まあいいわ……この人、今でこそ女主人ですが、十年前にはここで女中をしていて、この家の所有者と関係ができて、五年もしないでその人が亡くなって……その遺産で女主人におさまったんですから、運がいいわね。その人が肥ったうぶな女が好きだったそうでね。奥さんがやせて淑女だったからでしょうが……女主人になつても、このとおり貧乏な恰好して……中部フランスの小作人の娘で、経営上苦勞が多いからって、私を相談相手にしているのよ。私がいなかったら、映画一つ見にも出られないんだから——」と、しゃべりたてた。

日本語はありがたいもの。女主人は自分がほめられているものと思うのか、人の好きそうな目で、オケタニ君に微笑みかけた。アイダ夫人は数年ぶりに日本語を話すので、嬉しさに油紙に火がついたように一人で話した。

女主人が映画に出かけるころには、ご飯もたけ、オムレツもつくり、パンくずとブドー酒で作ったぬかみそ代用の大根も出て、オケタニ君は一年数カ月ぶりに、日本料理らしいものを食べた。

「ほんとに、オケタニさんがいらつしやるなら、鰯のおさしみでも、てりやきでもつくるんではしたが……今度は用意しておきますが、いつ来られる？」

「アイダさんが迷惑でなければ、毎日、日本食をつくってくれないかな。大都市に日本の留学生が数人いるから、いっしょになるけれど……アイダさんも損のないように、一食いくらと取ったら、みんな助かるんだがなあ」

「困ったわ。私は日本人には、死んだことになってるんだけれど……アプレゲールのバリの日本人のために復活しようかしら。マダム・マルケと相談して、一肌ぬぐかな」

そうアイダ夫人は、年がいてもなく顔を赤くして笑った。

そんなことで、この淫売宿の狭くて不潔な台所が、日本料理屋のようになって、およそ娼婦に縁のない日本の若い学者が、昼と夕二回、ここに出入りすることになったが、アイダ夫人がオケさんというように、なれなれしく呼ぶのも、恩を感じてのことであるらしかった。アイダ夫人は、それで一定の収入を得ることになって、生活が安定したが、留学生はまた、思わざる便益を得た。

第一、場所が便利である。気がねがない。そして、どのレストランや食堂よりも安い。

ぼくたちがバリについたころには、一食百五十フラン（百五十円）であった。カルティエ・ラタンの学生街の裏町で、もつとも安い食堂でも、オムレツにサラダにパンと、生ブドウ酒がまんしても、チップを入れて二百フランですませることは不可能であるから、好きなほどブドウ酒を

のみ、腹いっぱい食べて、そのうえ果物もいれて、百五十フランならば、ドルの制限を受けている留学生には、不潔なことなど問題にならない。そのうえ、ときどき日本から来る人びとの土産の、のりやうい、や鱈節など、日本の香にもありつけるのだ。そればかりでなく、アイダ夫人は十数年もバリにいて、バリは隅々まで知りつくして、フランス語と英語とを完全に話すから、私的な頼みごとでもできる。したがって留学生をたよって日本からバリに来る人びとは、みなアイダ夫人のところへつれて来られるのだった。

ぼくは一食百五十フランの日本食もありがたいが、それよりも、ここに集まる日本人に興味があった。みな敗戦後、専門の学問のおかげで、フランス政府に招かれて留学している、りっぱな学者や芸術家ばかりで、人間としてもすばらしい人びとであった。その人びとが一日の勉強の後で、たのしく夕食をともにしながら、雑談をするのは、バリの真中に、日本人の共同の広場ができたように感じられた。

その一人の理学者は、パリ大学の講堂で、世界から集まった生徒を前に、堂々と「生命の本源について」というフランス語の講演をした。その後で、質問者には、英仏独の三カ国語で答えていた。ぼくは母校の講堂で、あの淫売宿の台所の仲間を仰いで、感動したが、その講演のテーマは、いつも食後くわしくきくことができた。他の一人の東大教

授は、結核菌についてすばらしい研究をフランス文で発表した。が、夕食の前後に頼めば気軽に、ぼくの胸を診察したり、イケジマ君の脚氣を診察したりした。みんな専門の話をしたり、時には専門外の音楽の話になったり、オペラを総見したり、キャフェのテラスへ出かけていっしょに食後の酒をのんだりした。そんなばあい、アイダ夫人はいつよりっぱなマダムの役を演じた。

そんなわけで、一九五一年にパリに滞在した日本の学者には、モンパルナス裏の淫売宿の不潔な台所が、楽園のような思い出として一生残るであろう。日本の大実業家フジヤマ氏や大女優デコチャンも、はきだめのなかにおりた白鶴のように、この台所に現われて、欠けた皿にもったオムレツを古い箸で食べたことがある。それも、ここが日本人の共同の広場であつたからにちがいない。

思えば、占領下の日本が苦しかったように、日本を脱出してフランスへ行った人びとも、貧しかったから、そんな生活に甘んじた。そして、国外で貧しいから、さまざまな宝を心にたくわえることもできたろう。

五年の晩春から秋にかけて、この淫売宿の台所に出入りした人びとは、東京へ帰ってからも、年に数回集まってきたのしく一晚を語りあかすことにしている。パリで持った共同の広場を、東京でも持ちつづけたいと願うからである

う。みな、どんなにいがしくても、その日を楽しみにして、かならず出席する。

しかし、パリのモンパルナス裏のマダム・マルケの台所には、もう日本人は集まらない。

一九五一年の暮に、アイダ夫人が急死したので、パリの日本人は、気軽に集まれる場所を失った。言ってみれば共同の広場を失ったのだ。その後、イケジマ君はじめ、あの理学者など二度も三度もパリに行ったが、帰ってきては、誰も、あのレストラン・アイダがなくなつたからパリはつまらなくなつた、とさびしそうに言う。そして、バルザックの像の下をとおつて、ラスパイユ街を北へ行き、あの古い淫売宿の前にたたずんで、五年をかえりみるようだ。アイダ夫人が亡くなつた時、火葬にすることまで最後の面倒をみたセキグチ画伯は、その死をぼくに知らせてきた時、

「ここに、もう一人、巴里に死すが出ました」と、嘆いていた。

巴里に死すとは、ぼくの小説の題名であるが、若いセキグチ君の手紙を読んだ時、ぼくは、もう一つ、「巴里に死す」を書かなければならないことを、さとした。

それが死者との約束であつた。